

「宗義大綱」に対する疑義に答う

—特に竹田日濶師の質疑に対して—

茂田井教亨

宗務当局によって『宗義大綱』が発表されてから、賛否いろいろの反響があった。一つの仕事に対する賛否両論は当然なことであり、ことに宗義の大綱を一応形なりにも纏めようというような仕事は、出来たとしても、宗門人九十パーセントの賛同を得られるものとは限らない。日蓮聖人の教学のごとく、複雑多岐な要素をもちながら揺るぎなき体系を一貫させておられるものは、恐らく、末学の論議はいつまでも尽きないであろう。ゆえに原案作成当時の責任者であった故望月欽厚先生も、「これが永遠に変えられない、いわゆる金科玉条となるものではない。時代時代によって変更すべきものは、宗会の議決によって改めればよいのである」といつておられたほどである。だからわたくしは、その後の反論等に対してはほとんど無視してきた。と

りわけ、非礼顧みる必要のないものは齒牙に掛けぬことにしている。ところが、昨年の七月十五日に発行された「宗門改造」第一九二号所載竹田日濶師の疑義は、「片山宗務総長・茂田井責任者に質す」とあって、これは先方が納得されないまでも、一応はお答えするのが義務であろうと心得、以下、私見を開陳する次第である。

一、第一に申上げたいことは、竹田師に限らず、大崎の宗学ないし宗学者に対する疑義或は不満に、共通点のあることである。それはひと口に言えば、誤られた科学性と前近代性とである。したがって、大崎宗学者と外部論難者とのあいだには、宗学論または宗学観というものに、根本的相違があつて、たとい論議を試みたとしても、両者の論議には擦れ違が多いのである。これは個々の論議を交わす

まえに、宗学とは何であるか、また、その方法は如何にあらべきかというようなことを話し合う必要があるようである。そういう正しい意味での学問的努力なしに話を進めるのは、徒勞に等しいかも知れぬが、前言のごとく、道義的義務感から述べるものであることをご諒承いただきたい。

二、竹田師の論文(二)項に指摘された『大綱』が全体として「複雑化であり、非現実化であり、且つむづかしくして判かりにくい感じ」という点は、ご尤もと思う。当時作成に当たっていたわたくしどもでさえ、簡明化すということは却って難しくしてしまうことのように感じたものである。しかし、冗々たる文章で現わさず、二三行の文章で表現しようとする、聖人の教学のエッセンスのごときものを、生で吐き出したような形になったわけである。そこで望月先生も、「原案は出来たが、これは骨みたいなものだからこれを平易にしたり、現代化することは「現宗研」の仕事だよ」といわれたものである。——一寸楽屋話になって恐縮だが、数名の委員が挙げられ、先生が委員長となられたが、委員の作文は殆ど抹消され、全体は望月先生の文章で成った。それを「日教研」の所員会議にかけ、検討し決定したものが原案となり、それを宗務院は更に「教学審議会」に諮って、宗会提出の原案となったのである。——「解

説」の仕事は、先生のいわれた通り、片山総長の委嘱を受けて「現宗研」で一年がかりでやったのであるから、この方の責任は、師の仰る通りわたくしにある。

三、論文(三)項は(大系は体系の誤植)、もう一度『宗義大綱』をお読み頂きたい。(1)の「体系」は「日蓮宗は」と「日蓮宗」が主語になっているので、その「日蓮宗」の義学は、理・教・行・証の綱格をもっている——これは各宗共通の綱格——というのであって、それが具体的には「五綱」・「三秘」に当ろうというのである。遺文が御教示になっているというのではない。もし、日蓮宗には「理・教・行・証」などというものはない、といえは噴飯ものになろうし、あるとすれば、義学上、「五綱三秘」以外の何物でもないであろう。そこで私見を率直にいわせて頂けば、わたくしは「教・理」が「五綱」で「行・証」が「三秘」という具合に、判然と分けられるものではない、という考え方をもっていることである。『大綱』ではそのように分けているが、私見はその点、多少ニュアンスを異にすることをこの機会に表明しておきたい。それは左の遺文によるゆえである。

A 観心本尊抄

釈尊因行果徳二法(理)妙法蓮華経五字(教)具足。我

等受^{スレバ}持^ル(行) 此五字^ヲ自然護^ニ与^ハ(証) 彼因果功德^ヲ。

(定遺七一)

B 開目抄

一念三千の法門(理)は、但法華經の本門壽量品の文(教)の底にしづめたり。(五三九)

教(教)の浅深をしらざれば、理(理)の浅深弁ものなし。(五八八)

C 四信五品抄

云^ニ廢事存理^ニ者捨^ニ戒等事^ニ專^ニ題目理^ニ之云(一二九七)

妙法蓮華經五字非^ニ經文^ニ非^ニ其義^ニ唯一部意耳。初心行者不知^ニ其心^ニ而行^レ之自然当^レ意也。(一二九八)

四、四項では「五綱」の説明はそれでよいが、現代仏教学とは矛盾する面があるから現代化されていない、また、五時八教などは古曆昨食だから現代人の仏教学生は信用してくれない、というお説が述べられている。ここでは師は本末顛倒しておられるのではなからうか。仏教学があつてそこから宗義が出るのではない。聖人の宗教体験があつて宗義が生まれたのである。それが凡て仏教学と背馳したとしても驚くことはない。それを氣にしたら鎌倉仏教を否認しなければならぬことにならう。否認したとしても親鸞・道元・日蓮は生きてるのである。この事実を刮目しな

ければならない。いまの仏教学が仏滅年次を算定したり、仏典の成立を考究して、日本仏教史上の諸先師の所信と異つた結論が出たとしても、それは学問的業績として尊重されてよいのである。そのことと大無量壽經を通して弥陀の召喚の聲に従つた親鸞の宗教、法華經の六難九易の仏勅に身心を投じた日蓮の宗教とは次元が違ふのである。心ある人達から仏教学や仏教学者はあつても、仏教や仏教者が存在しないといわれていることに反省しなければならぬ。

最近の宗門人のなかには、日蓮聖人は今日の仏滅年次の算定からみると、像法時のご出生で、末法に入っていないと心配される向きが多い。わたくしは何という不見識なことを口にされるのかと、心外に堪えない。鎌倉仏教の祖師方は何れも五箇の五百歳説によって正法一千年・像法一千年を立てておられるが、正法五百年説もある。要するに末法の問題は、客観的に末法の年次を算えるよりも、宗教的末法意識が問題なのである。唐の善導でさえ、末法意識に生きた仏教者である。宗門人はもっと高い見識を持つていたゞきたい。

五、師のご所見では神力別付の一大秘法は本門の題目であつて、本尊・戒壇は含まない、というご意見のようである。『大綱』はそれに反し、神力所伝の一大秘法が三秘に

開出されるとしている。これは見解の相違といつて了えばそれまでだが、妙法蓮華經の五字から三秘を開出させては一尊四士論者の竹田師には都合が悪いということもあるのではなからうか。しかし、同じく一尊四士論者であった望月先生は、一秘即三秘・三秘即一秘を立てておられた。元來、日蓮聖人のご本尊は、他宗の本尊のように、単に信行の所対という狹義に止まらず、能觀(題目)所觀(本尊)相互交流媒介となる勝義に立つのであるから「三秘」は基本において質を同じくするものがなくてはならない。そこに「一念三千の仏種」という概念が立つのである。ご承知のごとく、『觀心本尊抄』に

所詮非_二一念三千仏種_一者有情成仏・木画二像之本尊有名無実也。(七一)

と仰せられたのはその原理をお示しになったもので「有情成仏」に「本門題目」が、「木画二像之本尊」に「本門本尊」が暗示されているといえるであろう。もし、師が強いて遺文に典拠を求められるなら、『曾谷入道殿許御書』の左の御文などが、その間の消息を窺うに足ると思う。

慧日大聖尊以_二仏眼兼鑑_レ之。故捨_二棄於諸大聖_一召_二出此四聖_一伝_二於要法_一也定_二於末法之弘通_一也。(九〇四)
大覺世尊以_二仏眼兼鑑_レ知於末法、為_レ令_レ對_二治此逆謗_一二罪_一

留_二置一大秘法_一。(九〇〇)

然後示_二現於十神力_一付_二屬於四菩薩_一。其所屬之法何物乎。法華經之中捨_レ取略捨_レ略取_レ要。所謂妙法蓮華經之五字名体宗用教五重玄也。……但持_二此一大秘法_一隱_二居於本処_一之後、後於_二正像二千年之間_一未_レ一度出現。所詮仏尊限_二末世時_一付_二屬於此等大士_一故也。(九〇二)

ここにいう「一大秘法」が「本門題目」に限定されないことは『觀心本尊抄』にも本抄と同致の文章をもって「名体宗用教南無妙法蓮華經是也」(七一七)と仰せられたとおり、この五字が五重玄義的に演繹されることを示されたものだからである。ゆえに像末弘通を相對されて、

像法中末觀音藥王示_二現南岳天台等_一出現以_二迹門_一為_レ面以_二本門_一為_レ裏百界千如一念三千尽_二其義_一。但論_二理具_一事行南無妙法蓮華經五字並本門本尊未_レ弘行_レ之。所詮有_二円機_一無_二円時_一故也。(七一九)

と仰せられている。すなわち、「要法」として「教」の格に立つときは「五重玄」の「五字」と規定され、それが教即觀觀即教的に実践し弘通されるときには能觀(題目)所觀(本尊)と分別され、いわゆる「事行南無妙法蓮華經五字並本門本尊」となるのである。

もしそれ「三秘」に分開された明文を求めれば、いうまでもなく、『報恩抄』の御文となるであろう。

問云、天台伝教の弘通し給ざる正法（「本尊抄」にいわれる「未広行之」の「正法」なり）ありや。答云、有。

求云、何物乎。答云、三あり。末法のために仏留置給

法……留置一大秘法」「但持此一大秘法」「伝於末要法定於末法之弘通」等の御文想見すべし。迦葉……

…天台伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり。求云、其形貌如何。答云、一は……二には……三には」（一二四八）

六、竹田上人は昔から『新尼抄』を毛嫌いしておられる。したがって、この御書から出る「起顕竟」を「迹門」のそれと断定されるのは無理もないが、『開目抄』にも

証前の宝塔の上起後の宝塔あて（五七二）

と仰せられ、また、この御文に引きつゞき分身の求集を諸経の説相と比較されたうえ、

総て一切経の中に各修各行の三身円満の諸仏を集て我分身とわとかれず。これ寿量品の遠序なり。（五七二）

と仰せられている以上、『新尼抄』を否定したとしてもどうにもならない宗義である。もし、他の遺文を拾えば、

『瑞相御書』に、

其上本門と申は、又爾前の経々の瑞に迹門を対するよりも大なる大瑞なり。大宝塔の地よりをどりいでし、地涌千界大地よりならび出し大震動は、云云（八七三〜四）

の御文もある。この法門は『文句』に

塔出為二両。一発二音声二以証二前。開レ塔以起レ後……起後者若欲開レ塔須集分身。明レ玄付囑声徹二下方二召二本弟子論二於寿量。』（会本廿二ノ四〇〜二）

とあるごとく、台当通轍の綱格であって、これあるがゆえに「但我が天台智者のみこれをいだけり」（五三八）のお言葉もあることを知らなくてはならない。これほどのこととは竹田上人もご承知のことと思う。

また、師が「十四大偽書」の中に数えられた『本尊問答抄』は、『常師目録』に『開目』『撰時』『報恩』の五大部に並べて録されている。常尊ほどの方が、偽書を五大部に並べて登録するというようなことは、恐らく考えられないことである。

七、「本門本尊と云へば必ず一尊四士以外に、他の本尊は断じてなしであるにも拘らず」「今回の宗義大綱には」「一言半句よりも」「説かれていないと云う事」を師は憤慨しておられる。望月先生はご存知のごとく一尊四士を主

張しておられた。これは一宗学者として個的立場である。

ところが、『宗義大綱』は、一宗の伝統を尊重し、その種の立場を慮った大公約数に立って成案されたのである。委員それぞれの内鑑を披瀝すれば、それぞれ異った『宗義大綱』が出来てしまうであろう。法門上の学解や論議は種を媒介としつつも個的主体がその立場である。『大綱』は個を媒介としながらも、種の立場を堅持せねばならない。師がもし、その個的立場にのみ拘泥して論議を好まれるなら、ヘルメットを冠り、ゲバ棒をもって、榮譽ある伝統の文化を破壊した、暴走学徒も等しい行為となるのではあるまいか。わたくしの信仰を卒直に述べさせていたゞけば、わたくしは「一尊四士」に随喜の涙をもって低頭礼拝し、「大曼荼羅」にも同じく恭敬礼拝が出来るのである。なんら法仏の矛盾を感じないのである。法華経に身命を捧げ奉る者何んでそこに矛盾があろうぞ。(なお、マンガラを本尊とは呼ばない、「常師録」にもない、といわれるが、周知のとおり、該書は「本尊聖教録」とあるのである。)

八、「戒壇」についてはご賛同をいたゞき、「感銘仕りました」と仰られて、榮譽と歓喜とを覚えた。師の卒直なご性格の現われと思う。

九、「受持成仏」と「靈山往詣」とを矛盾するごとく論

じた学者もいるが、幸いに竹田上人は「当を得て」いると仰せられ、何か心強いものを感じる。

十、「摂折」についてもご賛同のようであるが、わたくしは今にして「呵責謗法滅罪」という、極めて宗教的深みのある折伏の一面を取上げなかつた不明を恥じ、残念に思っている。

十一、「宗祖」についてのご所見は、竹田師のご見解として承っておく。たゞし、「日蓮はいづれの宗の元祖にもあらず」は、周知のように『妙密上人御消息』に出るお言葉である。師の見解からは「偽書」なのではあるまいか。

十二・三は、師の所信を披瀝されたものとして傾聴した。師の純粹に徹した「一尊四士」論は、竹田宗学として一見識を示し、無自覚な雑乱的信仰をもって日蓮宗徒と自任している者多き今日、よき清凉剤たることを失わないであらう。先輩に対する言辞の非礼に亘った点あることを多謝す。(一九六九、二、四)

なお、因みに最近『新尼御前御返事』の御真跡断簡が発見され、改訂版定本遺文第四巻に収録されたことを附記する。